

「学生のおもしろ企画・大学祭企画」実施報告書

※整理番号：9

企画名
日常風景の再考
実施日
平成 25 年 11 月 2 日（土）9：00 ～ 平成 25 年 11 月 3 日（日）17：00
実施場所
広島大学中央図書館前
企画代表者の氏名、所属
氏名：関谷 航 所属：工学研究科建築学専攻建築史・意匠学研究室
構成員の氏名
井出優実 神田陽悦 平原聖元 畑森翔紀 小沢啓太郎 八杉克志 徳本冬華 中野真季 川瀬功太 石橋祐太 名越希 関谷航 岡崎慎平 蘇フィティ 松本雅遂
指導的立場の教員氏名
水田 丞 助教
企画の目的及び内容
講義で習得した設計・意匠・環境・構造の知識を活かす場としてとらえ、現代建築の様相からコンセプトを考えて設計を行い、実際に形にするということを行う。そして企画の成果として大学祭の期間中にインスタレーションを行い、訪れる人びとに提案したものを体験評価してもらう。
来場者数
326(内アンケート回収枚数 84 枚)
主催・後援団体（外部のコンテスト等に参加する場合は、そのコンテストの規模）
主催：Arch-unit2013
活動の内容（準備、広報活動、当日の様子等）
<p>今回、計画の立案、予算、構造など実務に近い状況で設計を行い、講義で習得した設計・意匠・環境・構造の知識を活かす場となった。この企画に関して、「視覚」ということをテーマに活動を行い、昨年度の「色による錯覚」に対して、今年度は「立体と平面を用いた錯覚」を表現した。</p> <p>計画段階で完成品を模型・スケッチにより検討、実際の素材を利用した実験を行った。実際に今回自分たちの想像が成功するかどうかを実寸大模型でスタディを行った。その結果、当初の案が実現できないことがわかり、何度も検討を重ねて当日の完成に至った。今回の事で創造を現実のものにする事の難しさを痛感した。</p> <p>本年度は、当初の計画案が失敗だとわかり、試行錯誤により製作期間が十分とれず、時間がたつごとに条件が変わっていく焦り、何が実現できるかなど計画通りではなくその場での判断で組み立てていくことが迫られた。実際に施工期間は、約 1 週間かかり、部材を理学部に運び、そこで簡単な作業を行った後、会場で設営を行った。施工完了後、実際に空間が成立しているか自分たちでも確認を行い、当日ミスがないように配慮を行った。</p> <p>当日、展示室とはちがい通路に開かれた様子で展示したため、多くの通行者に関心を持っていただけた。また、仕掛けに気付いた際に、声をあげて驚いてくれる人が多くいた。その時に、気付いていてもあまり無関心だった人も近づいてきてくれて、人が集まっていく様子を見て、ただ外に開かれているだけでは人の関心を引く事ができず、人の賑わいが大切だということを体感した。</p>

「学生のおもしろ企画・大学祭企画」実施報告書

アンケートの結果（来場者にアンケートを実施した場合のみ）

84 名の方に今回の企画を書いていたいただいた感想より

- ・遠近法と立体を利用して不思議な絵になっていておもしろい。（女性）
- ・立ち止まるほど目を引いた。（男性）
- ・最初は仕掛けがわからなくて驚いた。（男性）
- ・子供もよろこんでくれて、おもしろかった（女性）
- ・些細なものだけど、誰でも楽しめるのでよかった（男性）
- ・遠近法で風景をみて感動した。

成果・課題

今回、普段の学校で学専門的な技術を一般の人にも伝えるだけでなく、技術を楽しんでもらえるような展示を行うことをねらいとしていた。

そのため、展示室という形ではなく、壁を減らしたり、材質を軽いものや、透けるものに変えたりしながら周辺と一体となった空間を作った。

しかし、周辺に開かれているだけでは、周りの人は素通りしてしまうか、気付いていても近づいてはもらえなかった。ある人が近づいてきて、声をあげて喜んでくれて、となりの友達もいっしょになってさわいでいると、自然と無関心だった人も集まってきてくれた。

その際に、人の開かれるということは、ただ周辺に開かれているということではなく、人のつながりや賑わいのあるところにあることができるのだということを体感することができた。

実施風景（写真）

